ブルガリの本社にはたくさんの絵画が飾られて、ギャラリーのような雰囲気が漂う。作品の多くは写実的な手法の新古典主義的な作風。右上：ゴールドのヴェールをまとい、モデルのような幻想的な女性像。シモナ・エア・ファブリッツィの作品。左上：ローマの町を望むオフィスで、ブルガリの邸宅を描いている。ルッロ・バルトッツィの作品。右下：女神イシュタルの像。その奥には実物が飾ってある。ローマ生れの幻覚画家、ルッロ・マリア・マリアーニの作品。左下：敬虔なるマリアの魂と神を思わせた、サルヴァトーレ・マグ・レンティの作品。

山本　このビルに入りましたら、たくさんの宝石をテーマにした絵がありましたが、どなたの発案なのですか。

ニコラ　友人であるアルナルドと二人でね。

山本　いつごろからなのですか。

ニコラ　一九九五年の三月ごろのことです。ちょうど皆でレストランでスパゲッティを食べていた時なんですよ。そう、宝飾をテーマに絵をかいてもらおうというすてきなアイディアが浮かんでね。でもアーティストには長いこと話をして、かいてもらうまではとても時間がかかりました。

山本　今、何点でらいあるのですか。

ニコラ　四〇点以上はありますね。アーティストは二五人ぐらいいます。

山本　こういうおもしろいプロジェクトにアーティストが参加して、その才能を企業が支援するというのは、アーティストにとってもとても幸せな出会いですよね。この出会い方を知りたいのですが。

ニコラ　私たちブルガリは、まだまだ小さな会社です。アメリカの会社には、アメリカのアーティストの作品をたくさん持って支援しているところがあります。私たちも、これを始めたときにはいろ

現代メセナの目指すもの

世界の宝石店「ブルガリ」のアートコレクションに会いに

右：中央にはパペダイヤの四角なブローチを置き、プレートの回りにはブルガリのネックレスをあしらい、ユーモアを感じさせる。イリーブの花と深い青な空が美しい。フランチェスコ・ボッシニの作品。下：頭の遺跡をモチーフに、穴からサン・ピエトロ大聖堂のターボラをのぞいて、回りにはブルガリのネックレスが飾ってある。ジョヴァンニ・アルウンジェリの作品。その下に並ぶ小物入れは、顧客たちにかかせたブルガリの個人コレクション。

メセナとは、企業が文化・芸術活動に対して後援や資金援助を行なうことをいいます。かつてルネサンスのころには、ミケランジェロやラファエロら、教会からの依頼という使命は違いますが、教皇というスポンサーがいました。アーティストがその才能を伸ばすには、何かの支えが必要なのは時代が変わっても同じこと。現代では、それが企業であることが多いのですが、日本ではバブルがはじけたとたんにその機能をなくしてしまったようです。そんな中、イタリアで元気にメセナの役割を果たしているのが「ブルガリ」。そのコレクションをおもしろいというのがあると聞き、収集の責任者でもある副社長のニコラ・ブルガリさんを山本さんとお訪ねしました。

ブルガリのコレクションをサポートしているのは、
「ポリッティコ」というローマで注目のギャラリー。
il Politico
Via del Banchi Vecchi 135, Roma
Tel. Fax06-6832574 地図

上の写真2点は「ギャラリー・ポリッティコ」が画家たちに提供しているスペースで、画家たちの描いた家具が展示されている。通常は公開していないが、家具をごらんになりたい場合の問合せは、左記のギャラリーへ。

「初めはかなり
みんなから白い目で見られました。
でも今は反対にショップに
飾るように要請があるのです」

どこか滑稽味ありげでユーモアを感じさせる絵を、チェストと組み合わせをセットにして描いたものは、ブルガリ・ファミリーのプライベートコレクション。遊び心は、イタリア人ならではの作品。

右ページと同様に、画家たちによるいすの絵。この発案者はギャラリー「ポリッティコ」のアンドレアさんと、このいすのデザインをし、興味絵作者であるマッシモさん。作者は右から、サルヴィ・ルッツ、サルヴァトーレ・ブルヴィレンティ、ベアトリーチェ・ボルドーネ。画家自身のイタリアの心象風景が描かれ、物語性の強いものになっている。

画家に好きなように絵をかかせないというのがプライベートコレクションから。どれも世界で一つだけのもので、オリジナルを持つことがこの上もなくうれしい。作者は右から、ウバルド・バルトリーニ、ケルロス・ヴォンスパーグ、ジョヴァンニ・アルウンジェリ。長剣も滑稽も描かれている。画家自身の個性がそれぞれに活かされて楽しい。

ら楽しかった、ただアートを買うというのではなく、共同作業なわけですから。

山本　でも、これがすごくらしいと感じるのですが。

ニコラ　アーティストは、作風を変えるわけではなく、自分の作風で表現するのですから。

山本　そうですね。一点ずつ見ていると、アーティストのアーディアを見るのは楽しいですね。

ニコラ　アーティスト自身も、自分の世界を崩さずに描き上げていることに成功していると思いますね。自分自身の頭がダイアモンドなんて、ちょっと皮肉っぽい絵もあるし、ファンタジーのある絵もあります。

山本　ほんとうにいろんな作風がありますね。

ニコラ　ただ、ブルガリにとってもアーティストにとっても危険な仕事で、かなりアイロニーが強くなって重くなって、お互いが共鳴し合わないと、よくない作品が出てくるわけですね。そうならないように、チェックをしないといけない。だからブルガリにとってもアーティストにとっても、楽しいんだけれど神経をつかう仕事ですね。

山本　興味のあるのは、そういうシステムです。ただかかせる、チェックするではだめだと思うので。たとえば私は、ルイ・ヴィトン・パリから依頼されて、"トラベル・ノートブック"のシリーズで東京をテーマに五〇作品かいたのですが、それをかくのに三年ぐらい時間をかけ、何度も話し合った末に生まれたのです。それは時間があったからよかったのですが。ブルガリではこれからはどのようなシステムとして強化していくかをお聞かせいただけますか。

ニコラ　このプロジェクトを会社として始めたときには、かなりみんなから白い目で見られました。会社の資金をつかって無駄づかいをしていると。でも三年ぐらいでこのプロジェクトが受け入れられて、反対にショップにアーティストの作品を飾るようにと要請があったのです。今考えているのは、ブルガリの本社がローマなので、ローマを思わせる絵をかいてもらおうということです。今までは、企業内に飾るのはブルガリの作品をかいてもらっていましたが、ショップにはその雰囲気をかいてもらうつもりです。私はローマ生れでローマ育ちですが、毎日発見することばかりです。そういったものをイメージにかいてもらおうかなと思っています。

山本　それはぜひ見てみたいですね。それをかけるのはイタリア人だけなのですか。

ニコラ　どの国の人でも。私が思うに、すばらしいローマをかいたのは、一六〇〇年代以降、ローマの人はいません。

山本　ヴァティカン美術館でも確信しましたが、芸術は世紀を超えて残っていくものですから、そのアイディアがずっと続けられるといいですね。そして才能あるアーティストが育っていくことを願っています。

　アートに対しての造詣の深さ、そして余裕。いすやチェストなどの個人コレクションには、遊び心も加わっています。芸術の奥深さを知るブルガリだからこそ、斬新なデザインのジュエリーをはじめ、時代性のある心を引きつけるアイテムを次次と生み出しているのでしょう。話をしながらもアイディアが浮かんでくるというニコラさん。この秋には、ローマのグランドホテルにブルガリ・スイートなる部屋もでき、ブルガリをあしらった絵が飾られるとか。誘惑のスポットがまた一つ生まれそうです。